

美術館と連携した鑑賞授業の実践

—美術館の出張講座による実物作品の鑑賞授業—

牧原 竜浩

美術作品の鑑賞授業において、対話による鑑賞授業が求められている中で、図版や写真を用いた鑑賞だけでなく、実物の鑑賞の重要性もさげばれている。しかしながら、美術館へ足を運ぶことが困難な実情を抱えた学校も少なくない。同時に、美術館側から学校へ作品を貸出し、鑑賞授業の充実を図る試みも増えてきている。国立美術館が主催する研修と、このたび、当校で行われた美術館による出張講座での鑑賞授業の実践による成果と課題を報告する。

1. はじめに

独立行政法人国立美術館が主催する「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」が、平成26年8月4日(月)～8月5日(火)の2日間、東京国立近代美術館、国立新美術館で行われた。受講者は小・中学校教員(国公私立校の教員)、美術館学芸員、指導主事で、全国から100名を対象としていた。各都道府県及び各政令指定都市教育委員会が受講希望者を1～2名に取りまとめ、国立美術館研修担当宛に推薦するものだった。広島県では、私と博物館の学芸員の2名が推薦された。

この研修の目的は、「子どもたちの健やかな成長のためには、幼い頃から芸術・文化に触れることが重要であり、小・中学校においても、鑑賞教育は重要な教育活動とされている。このような鑑賞教育の重要性を踏まえ、全国の小・中学校等の教員と美術館の学芸員などが一堂に会してグループ討議等を行うことにより、美術館を活用した鑑賞教育の充実及び学校と美術館の一層の連携を図るため、本研修を実施する。」というものだった。

この指導者研修のユニークな点は、学校や地域間のみならず、職種も超えているところにある。立場の違う三者が集うことにより、他の研修会では得られない意見交換や、研修後のネットワーク形成が可能になっている。またプログラムには、課題作品の前で約4時間も話し合う「グループワーク」や、メンバーを入れ替えながら会話を続ける「ワールドカフェ」が取り入れられ、受講者が主体的に関わることにより、この2日間の研修の成果を、自分の職場や地域に指導者として還元できることが期待されている。

この研修の後、11月17日(火)に広島県立美術館が開催する「美術作品鑑賞教室」出張講座をおこなっていただけのこととなった。これは、広島県立美術館が所蔵する優れた美術作品を学校に持ち込み、本物の作品を用いた鑑賞授業を年に数回行われているもので、主に遠隔地の学校を対象に、希望する学校が申請して、選考され

て決定されるものである。このたび、美術館の御好意で当校が選ばれた。鑑賞授業の指導者研修で学んだことを生かせる場としておこなった鑑賞授業の様々な課題点をまとめてみた。

2. グループワークでの鑑賞授業の課題

研修1日目のグループワークは、東京国立近代美術館を会場におこなわれた。私の参加したグループは、11名(中学校教諭7名、指導主事1名、学芸員3名)で、ファシリテータを中心に活動した。メンバーは遠隔地の課題を含んだ鑑賞指導という共通の課題を持ち合わせていた。実物作品を前に鑑賞授業をおこなうことが、図版や画像を用いた授業とどのような違いがあるのか、そして、グループワークにおいて生徒たちが自分の意見を発言しやすいようなコミュニケーションの図りかたの工夫などを学んでいった。

前半は2人組で互いの似顔絵を描き合い、次に4人組でアートカードを用いてゲーム形式で問題を出し合っ、コミュニケーションを図りながら自由な発言や見方を促すような内容で和やかな雰囲気でおこなわれた。後半は、課題作品《臥龍梅》(丸木位里)を全員で鑑賞した。大きい屏風型の作品は見る位置や細かい部分で印象が変わることや、単純な墨絵のようで実はかなり手の込んだイメージがつくられていることなどを感じながら、作品から如何に多くの情報を紡ぎ出し、その情報から自分なりの解釈をつくり、価値を見出すか、創造的な鑑賞としての対話を用いたギャラリートークとした。その後、中学生を想定して鑑賞プログラムを考案した。美術館、学校という「場」を設定し、プログラムを完成させることが目的ではなく、連携をどのように取り入れ、効果的なプログラムを考えればよいか、課題を共有しながらその必要性を実感するワークショップと捉えての活動だった。

この活動を通して、大切なのは、ウォーミングアップ

で似顔絵を描き合うなどして何でも言える関係性をつかったこと。これができなければ、生徒一人一人の見方や感じ方が大切にされるような、美術の授業にはなっていない。ここを飛ばして鑑賞の授業だけをやっても、なかなかよい授業に至らないことが想像できる。そして、実物を鑑賞することで、図版や写真との大きさや色、質感の違いなど多くの発見があり、実体験を通して、実物作品鑑賞の大切さを学んだ。ワークシートについても、活動のねらいに即して順を追って思考が高められるようになっていなければならない。ついワークシートというと、先生側が生徒の実現状況をみるためのものとしてとらえられがちであるが、ワークシートは、生徒たち自身が見かたや感じ方を深めるための手立てとして存在するものだということを考えて、単語や短い文章を箇条書きするようなスペースにしておく工夫が必要だと考えられる。

3. ギャラリートーク分析

ギャラリートークは、美術館での鑑賞活動の基本である。展示室内で実作品を前にして行うギャラリートークには、迫力のある大画面・細かく描きこまれた細部・力強い筆使い・盛り上がった絵の具などを心ゆくまで観察できる良さがある。また、作者が確かにそこにいたと実感したり、前後の展示作品との関係を考えたりと、美術館ならではの展開も期待できる。研修2日目のギャラリートーク分析では、小学生と中学生の、美術館での対話型鑑賞授業をおこなったビデオをみながら分析していった。

小学生と中学生の違いを見ていくと、彫刻作品の鑑賞時には、小学生は彫刻の人物の真似をしたり、全身を使って体で見ている。対して中学生は作品と距離を置いて客観的に捉えようとしている。ここが決定的な違いであるが、作品を味わうという点では、中学生でも身体を使って見せることは有効である。かつて小学校時代に鑑賞した手法を使って中学生も同じように作品を味わう。そういうことも考えられる。中学生になると、制作技法とやどのように作ったのかという作品そのものの作られ方にも興味が出てくる。ブロンズであれば実際には粘土で作って鋳物にすると先生が説明しているが、生徒はそういうプロセスを知らないわけで、「大きなものから彫ったのではないか。」なぜか、それは「つなぎ目がないから」と言っている。このように生徒なりの根拠を持って話していることがわかる。このように自分なりに物事を考えながら見ていくのが中学生の特徴である。

ここでのファシリテーターの役割は、生徒それぞれが意見を出し合い、想像力を膨らませ、主体的に鑑賞させるため、生徒の意見を否定せず、尊重しながら対話を進

めていくことである。ただし、生徒の考えを引き出すことに重点を置いてしまうと作品の本質や作者の意図とかけ離れてしまう懸念がある。その問題に関しては、発達段階によって変化することがわかっている。

4. 出張講座での鑑賞授業（打ち合わせ）

広島県立美術館の所蔵作品を学校に運んでいただき、生徒たちに実物を前に鑑賞授業がおこなえるということで、これまでの指導者研修で学んだことを実践する場となった。

美術館との打ち合わせでは、まず、学校側の要望をこのように伝えた。「美術作品に興味を持ち、実物の良さが伝わり、美術館に足を運ぼうという気にさせる授業。そして、鑑賞方法を学び、新しい価値観を身につけ、大きく成長するきっかけにしたい。」この要望から、美術館からの対応として、「美術の持つ多様な価値観に触れさせる。美術作品に含まれる、複数の造形的な視点から読み解きのできる作品を鑑賞する。」そして、作品の選定をしていただくため、学習目標を次のように設定した。

《学習目標》

①美術作品を色、形、素材、構図といった造形要素をもとに、自ら作品の主題を想像することができる。

②他の生徒と意見を述べ合い、話し合いの中で自分の意見を客観的にとらえ、深めていくことができる。

③作品鑑賞を通して、様々な地域の歴史や文化にふれ、幅広い知識と価値観を身につけることができる。

このような目標から5つの作品を選定していただいた。

A：鯉江良二「VESSEL」2006年 陶器。

選定の視点：自然素材の力強い造形、日本特有の否定美という価値観。

B：テケ族 トルクメン人「首胸飾り（ブカウ）」19世紀中期 銀・鍍金・ガラス

選定の視点：普遍的な貴金属の価値、国際理解。

C：佐藤敏「MAN・面・MAN」1971年 陶器

選定の視点：難解なオブジェ、陶器を色、形を手掛かりに読み解く。

D：角浩「平和のメリーゴーランド」1976年 油彩

選定の視点：描かれた具体的なモチーフを手掛かりに読み解く。

E：菅井汲「FESTIVAL DE TOKYO」1969年 シルクスクリーン、紙

選定の視点：幾何学図形と色彩による抽象表現を読み解く。

次に、以上の5点を展示する場所を確保しなければならぬ。作品サイズから、美術教室では狭すぎるのが分か

った。そこで、マルチメディアホールという場所を使用することにした。設置されたプロジェクターで視聴覚授業やコンサートなど行うことが可能な場所で、椅子を収納するとかなり広いフラットなスペースになる。さらに、日光が差し込むことなく、ほこりもたたないということで作品展示に最適な場所であった。

《学習計画》

対象生徒は、高校一年生の美術選択者の38名のクラスに設定した。2時間連続の授業なので作品鑑賞時間がとれることが理由である。学習計画を全4時間(2週)で事前学習を2時間おこなうことにし、次のように考えた。

①資料プリントやスクリーンの画像を鑑賞し、自分で感想を述べ、題名をつける。(1週目)

②他の生徒たちと感想を述べ合い、自分の意見をまとめる。(1週目)

③実物作品を鑑賞し、画像で見たときとの違いを述べ合う。(2週目)

④作品解説を聞き、感じたことを文章にまとめる。(2週目)

1週目の事前学習では、作者や題名は明かさず、画像だけを見て、作者はどのような意図で制作したのか、想像しながら分析的に鑑賞し、2週目で、実物を見て、どのような発見があったのかを述べ合い、その後、作品解説を聞いて、自分が想像していたことと、どのような違いがあったのか。これにより実物を見ることの重要性を感じることができるのではないかと思った。

5. 出張講座での鑑賞授業(事前学習)

事前学習では、1作品ごとにスクリーンで作品画像を鑑賞し、ワークシートに作品の印象を記入して、作者の制作意図を考える。それをもとに、作品の題名を考えてみる。そして、周りの生徒と話し合いながら、制作意図について議論を深める。何名かが発表して、他の生徒の意見も取り入れながら、自分の意見をまとめていく。

《生徒のメモ》

A: 鯉江良二「VESSEL」2006年 陶器 について
・土のような素材で作られており、大地を連想させる。
・花を生けるため。・クモの巣みたい。・壺・水が垂れていったような跡・地球儀みたい・経線のような模様・赤い空・怒り・爆弾みたい・かたそう・絵の具が溶けて自然にできた模様・オレンジ色の花のよう・丁寧に作られた模様ではない。・ヨーロッパの誰かが自分の悩みを作品に表した。・茶色が酸性雨に浸食されたように見えるため、酸性雨の怖さを伝えようと地球に似た物体にした。・模様が鳥の形にも、木が枝分かれているようにも見えるので、休んでいる鳥を表している。

B: テケ族 トルクメン人「首胸飾り(ブカウ)」19世紀中期 銀・鍍金・ガラス について

・魔術みたいな呪いの雰囲気・風鈴や鈴・犯罪、悪のイメージ・罪人にとりつける器具のよう・中央アジア・インド・昔・イスラム文化のよう・馬の鞍飾り・腰巻き・おじいさんの顔・装飾・南米・可動部がとても多い・重みのある見た目・エジプト

C: 佐藤敏「MAN・面・MAN」1971年 陶器 について
・目がない・硬そう・花・ひまわり・首から上のみ・アジアの僧をイメージした・盲目・全面に模様・恐い・模様が古代文字みたい・少し気持ち悪い・石か粘土か

D: 角浩「平和のメリーゴーランド」1976年 油彩 について

・ハト・いろいろな国、人種・リボンで結ばれていない木がある・枯葉・ピエロ・馬に模様がある・時計回り・青空・メリーゴーランド・平和的なイメージ・リボンが国境を表している・真ん中の木の下に枯葉が落ちている・上と下で色のイメージが違って、明るいのか暗いのかわからない

E: 菅井汲「FESTIVAL DE TOKYO」1969年 シルクスクリーン、紙 について

・左右対称・カラフル・アルファベット・ストライプ・同じような模様・幾何学模様・メモリ・鮮やか・抽象的・文字が書かれているよう・現代的・簡略化したような・5つのパーツでできている・何かの番組のオープニングで流れそう・楽しそう・架空の世界にあこがれているよう

それぞれの作品について、生徒たちはこのような印象を述べた。見た目の印象を述べるところから始まり、徐々に作者の制作意図を想像しながら主題を考えていくという流れだった。意見を述べるのが困難な作品や生徒に対しては、中学生のギャラリートーク分析にもあったように造形要素(色、形、構図、素材)の観点から挙げさせることで作品分析をするきっかけになると思う。ワークシートにも、初めから文章でまとめさせるのではなく、箇条書きで感じた印象を挙げやすいよう、メモ欄という形で大きな枠の中に自分で自由にまとめられるようにした。

6. 出張講座での鑑賞授業(実物鑑賞)

鑑賞授業当日は、美術教室で前回のワークシートを返却し、実物を見てどう感じたかをまとめるワークシートを配布した。そして、マルチメディアホールへ移動してまず、実物作品を自由に鑑賞し、それぞれの作品について印象を書かせた。その後、それぞれの作品につき約10

分間、自分の意見を述べ合った。最後に学芸員の方に解説していただいた。生徒たちの意見が出にくい場合のために、こちらからの質問をいくつか準備した。

A：鯉江良二「VESSEL」2006年 陶器 の場合

- ・この作品は何でできていますか？
- ・この作品はきれいですか？
- ・材質や模様からこの作品にはどんな意味がありますか？

- ・あなたならいくらで買いますか？

などの質問により対話が深まることを期待した。そして最後に感想をまとめるといった流れでおこなった。

《生徒のメモ》

A：鯉江良二「VESSEL」2006年 陶器 について

- ・写真よりもきれい・思ったよりも立体的に塗られている・中にも模様が反映されている・分厚く大きい・高そう・横から釉薬をかけている・裏に×印・遠くから見るときれい・色に深みがある

B：テケ族 トルクメン人「首胸飾り（ブカウ）」19世紀中期 銀・鍍金・ガラス について

- ・金のように赤い宝石・思ったより小さい・光沢がある・立体感がない

C：佐藤敏「MAN・面・MAN」1971年 陶器 について

- ・中は空洞だと思う・思ったより大きい・灰色ではなく白く暗号みたい・不気味・男？女？・怖い

D：角浩「平和のメリーゴーランド」1976年 油彩 について

- ・繊細なタッチ・馬が葉・下描きの跡が見えた・厚塗り・馬の模様が細かい・一番好き・

E：菅井汲「FESTIVAL DE TOKYO」1969年 シルクスクリーン、紙 について

- ・鮮やか・思ったより丁寧・発色がきれい・2cmきざみの目盛・遠くからでもはっきり見える・細かく濃淡がある・にぎやかな感じ・切ったり張ったりしているよう

実物を見てからの感想は、思ったより大きいことや色が鮮やか、細かいといった印象の他に、裏側や内側、細部の観察や色の深みなど、立体物は特に画像では見ることのできない様々な視点で鑑賞できたことで多くの発見があったことがうかがえる。

《生徒の感想》

- ・やはり、画像で見るのと全く違いました。実物の迫力や繊細さを間近で感じる事ができてうれしかったです。今まで美術館では、きれいだなあとかしか思わなかったけれど、それぞれの解説を聞くととても深い意味が込められているということがわかりました。これから美術作品に触れる機会があれば、作品の意味もよく考えようと思いました。

- ・単純に作品を見てどうかだけでなく、その背景なども考えることでより良い鑑賞ができるとおもう。

- ・解説を聞いて、題名が思いもよらないものだったときさらにその作品に興味があった。

- ・みんなで意見を交換し合っていく中で自分と同じように考えていた人もいたし、こういった見方もあるのかというように人もいました。見る人によって価値がちがってくるということがわかりました。

7. 成果と課題

生徒たちの感想を見ると、実物の迫力や繊細さを目の当たりにして、実物鑑賞の重要性を知り、美術館へ足を運ぶきっかけになったと思う。そして、意見交換により、自分と他の生徒の価値観の相違など、新たな価値観の発見にもつながり、鑑賞教育の成果があったと思われる。

それに対し、課題点は、1作品に10分間では、意見を出し合い、生徒たちで意見をまとめるところまでには至らず、もう少し話し合いの時間がほしいと思った。そのため、クラス全員で話し合うより、5人くらいの少人数で話し合いをおこなったほうが、議論が深まったのかもしれない。

もう一つは、学芸員の解説を聞き、自分の意見が当たったか外れたかが気になる様子があった。これは、高校生だということや生徒の特性もあるかもしれないが、正解を求める傾向がみられる。対話による鑑賞のときに自由な意見が出にくかったのは、これが理由の一つだと思われる。これは、発達段階を考えた目標を設定しなければならない。小学生では、さまざまな発見を通して、自由な発想で独自の世界を想像するし、中学生では、造形要素から自分で解釈し分析していく。更に、高校生では、作品解説を聞いた上で、その作品に込められた思いや国や民族、歴史をふまえた自分なりの解釈をおこなえるようにする。というように、作品鑑賞の次の段階も必要になってくるかもしれない。

ただ、鑑賞において、先ず、作品の前に立ち、自分自身の意見をもとに作品の解釈をおこなうことが重要であることは変わらない。美術館へ足を運ぶことだけでなく、鑑賞を通して、幅広い価値観を身につけていくためにどのようなことをすれば、鑑賞教育が充実していくのか考えなければならない。

参考資料

- *美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修 <http://www.artmuseums.go.jp/study/index.html>

- *国立近代美術館（作品資料参照）

- *広島県立美術館（作品資料参照）